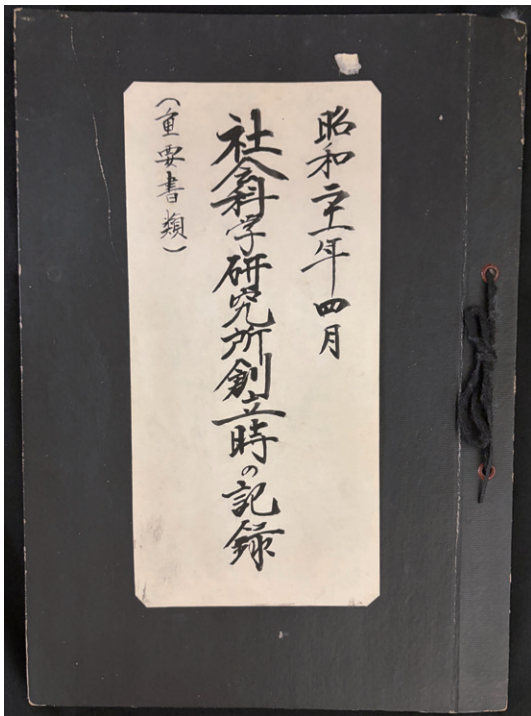


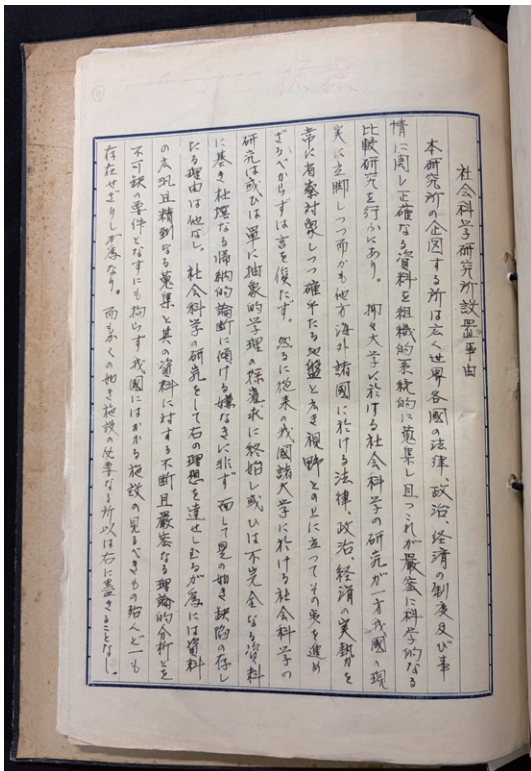
東京大学 文書館ニュース

The University of Tokyo Archives Newsletter

社会科学研究所設立80年



▲『総長肖像パネル：矢内原忠雄』
(参照コード：S0758/0016)



社会科学研究所は、終戦後の1946（昭和21）年、「広く世界各国の法律、政治、経済の制度及び事情に関し正確なる資料を組織的・系統的に蒐集し且つこれが厳密に科学的なる比較研究を行ふ」ことを目的として、設立されました。初代所長には矢内原忠雄が就任しました。

「社会科学研究所設置事由」などの研究所設立に関する文書が綴られた『昭和二十一年四月社会科学研究所創立時の記録』（参照コード：S0585/0071）は、昨年度社会科学研究所から当館に移管されました。

vol. 77

Contents

- 2 東京大学文書館柏分館への着任にあたって
印出 也美
- 4 長岡半太郎関係資料の由来と内容について
中野 知也
- 6 業務日誌（抄）
(2026年1月～2026年6月)
- 7 資料の公開について
- 8 文書館Topics
東京大学文書館の業務に学ぶ
大木 悠佑、山口 翔子、
湯地 ふたば

『森林動物学研究室旧蔵写生画帖』（F0310）をデジタル・アーカイブで公開しました



森林動物学研究室で描かれた虫の写生画です。様々な昆虫の絵が精密に描かれています。当館デジタル・アーカイブにてご覧いただけます。



東京大学文書館
The University of Tokyo Archives

東京大学文書館柏分館への着任にあたって

東京大学文書館 学術専門職員 印出 也美

1. 歴史資料との邂逅

筆者は学部を昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科で、修士課程を同大学院生活機構研究科生活文化研究専攻で過ごした。大学入学当初の筆者は、近現代の戦争や植民地について、漠然とした関心を抱いていた。その視野を広げ、かつ歴史学およびアーカイブズ学の端緒に触れるきっかけとなったのは、戦後史料を後世に伝えるプロジェクト「被団協関連文書」（以下、戦後史PJ）への参画であった。本プロジェクトは、特定非営利活動法人ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会（以下、継承する会）と協働し、史料整理や研究発信を行うものである。継承する会では、日本原水爆被害者団体協議会（以下、日本被団協）や各地の被爆者の会等が持つ被爆者運動史料の収集・整理・保存およびその活用に取り組んでいる。当時、学部生であった筆者が初めて現物の史料

に接した際、紙の質感や筆跡から立ち上がる「かつて存在した個人」の生々しさに強い衝撃を受けた。この活動から、史料を分析して歴史を構築する実証的研究の醍醐味を認知すると同時に、その基盤を支えるのが史料整理や目録作成であることを学んだ。また、日本被団協の元事務局員であり、現在は継承する会の事務局員を務める栗原淑江氏の指導のもと、史料整理・目録作成をした経験は、筆者にとってアーカイブズを学ぶ第一歩となった。栗原氏からは、史料整理や目録作成の手法にとどまらず、史料が生成された背景について、自身の経験を交えた教示を得た。この作業はいわば、資料群が生成された背景にある原秩序を読み解くプロセスだった。同氏の語りと史料から得られる情報により、歴史を自らの手で構築し、研究発表する過程は、座学では体験できない貴重な機会となった。

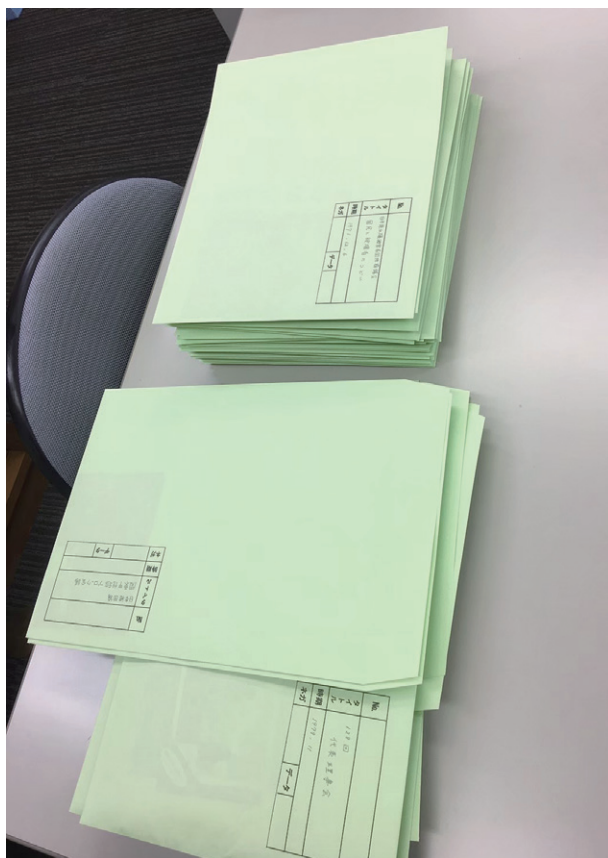
戦後史PJにおける一連の経験は、歴史学者としての姿勢を培うのみならず、アーキビストとしての「身体知」を形成する重要なプロセスであったといえる。こうした現場における実践的な感覚こそが、のちに歴史資料をデータとして客観的に扱う際にも、その背後にある人間の営みを看過しないための重要な契となっている。

一方で、被爆者や遺族、そして現在進行形で活動が続ける運動団体に関わる被爆者運動を扱うことの困難さにも直面した。研究発表に対し、当事者から叱責を受けた経験は、歴史が単なる「過去の事実」ではないことを痛感させた。今もなお「生きた歴史」である事象のなかで作成された資料は、現用の性格を帯びながら、歴史資料へと変貌していく。この経験は、文書館における現用文書から歴史公文書への評価選別や移管というプロセスを理解する上での、重要な思想的背景となっている。

2. アーカイブズの国際的知見

自身の研究においては、日本統治期の台湾における政治動向や農事政策を対象とした。

論文執筆にあたり、2023年2～3月・8月に国立台湾大学図書館を訪れた際の経験は、アーカイブ



戦後史PJの資料整理会にて整理された写真資料（東京、2020年撮影）

ズの在り方を再考する契機となった。

国外の利用者に対しても障壁の低い申請、言語的サポート、高度に推進されたデジタル化によるアクセスの容易さは、研究の効率を飛躍的に高めるものであった。資料収集という目的を超えて、館全体のホスピタリティと利便性が研究をいかに支えるかという利用者側の視点を、身をもって経験したことは、現在の業務において、利用請求や審査に携わる際の指針となっている。

大学院におけるアーキビスト養成課程への進学は、こうした実践的な経験を理論的に体系化する試みであった。特にイタリアへの研修（2024年2～3月）では、中世の古典籍を擁する国立マルチェッリアーナ図書館や、膨大な書架延長を誇る国立ヴェネツィア文書館を視察し、イタリアにおけるアーカイブズの実態を学んだ。日本国内のアーカイブズにおける課題を相対化し、国際的な文脈の中で日本におけるアーカイブズ機関の立ち位置を把握することの重要性を再認識する機会となった。



国立ヴェネツィア文書館正面（イタリア、2024年撮影）

国立台湾大学図書館での歴史資料へのアクセスの容易さと、イタリアで目の当たりにした数世紀にわたる原本保存の実態に触れた2つの経験を振り返ると、筆者のなかでアーカイブズにおける「利用」と「保存」という、時に相反する二項対立をいかに止揚すべきか、という問いが立つ。イタリアの文書館では、歴史の蓄積を守る意志を感じた一方で、台湾では現代の技術を駆使して歴史資料の利用を促進する姿勢が見られた。当館においても、歴史資料の劣化を防ぎ保存するという使命と、社会の要請に応え広く公開するという使命の両立が常に求められる。実務にあたる際、審査や利用制限の判断は単なる規則の適用ではなく、こうし

た保存と利用のバランスを、個別の史料の性質に照らして誠実に模索することも重要であると考え

3. 柏分館着任にあたっての展望

筆者は大学院修士課程修了後、昭和女子大学に助手として1年間勤めた。その後、湯上良教授（昭和女子大学大学院）および当館の森本祥子准教授にご縁をいただき、本郷本館での勤務を経て、2026年5月に柏分館の学術専門職員として着任した。

筆者のキャリアにおいて、アーキビストとしての歩みは未だ端緒に就いたばかりであり、日々の業務はアーカイブズ学の理論を実践へと昇華させるための極めて密度の高い学びの場となっている。現状、資料の利用者と直接関わる機会はまだまだ少ないが、大学・大学院での活動を通じて史料の背景に存在する多くの当事者や関係者と深く関わった経験は、筆者のアーカイブズに対する姿勢の根幹を成している。

さて、当館のような大学文書館の役割を考えたとき、それは単なる歴史資料の保管庫にとどまらない。大学は知の生産拠点であり、そこには教育・研究のプロセスそのものが記録として構造化されている。筆者がかつて経験した戦後史PJが、大学という教育・研究の現場から発信され社会的意義を有したように、本学が所蔵する歴史資料もまた、新たな知を創造するための「動的な学術基盤（あるいは、生きた素材）」にほかならない。

今後は、自身がこれまで享受してきた教育・研究上の恩恵を、今度は職員として利用者に還元していくことが求められる。学生時代を通じて多くの人々と協働し、歴史資料が内包する多面的な価値を体系的に学んだ経験を糧に、本学所蔵資料の学術的価値や有用性をより多くの利用者に提供できるよう努めたい。本学のアーカイブズが、より開かれた、かつ強固な知的基盤として発展を遂げるよう、日々の業務に邁進する所存である。

長岡半太郎関係資料の由来と内容について

東京大学大学院教育学研究科 博士後期課程 中野 知也

2025年7月18日、東京大学文書館に長岡半太郎関係資料（F0332）の寄贈があった。本稿では、偶然資料寄贈の仲介者となった私の立場から、当該資料の由来と内容について簡単に紹介したい。

発端は寄贈の半年前に遡る。その頃の私は、帝国大学の人事制度、特に大正期に成立したとされている定年制（停年制）に関心を持っていた。東京帝国大学における定年制導入にあたっての最初の公的な議論の場となったのは、大正7年に山川健次郎総長の諮問機関として設置された「帝国大学制度調査委員会」（以下、「調査委員会」）であったが、その審議過程が記された資料の存否を調べていた。

調査委員会は、定年制の他にも、総長公選制、教授助教授の選考方法、4月入学、成績評価における点数制の廃止といった東京大学史上の重要事項を扱っている。調査委員会の動向については、『東京大学百年史：通史二』や同書の刊行以前の予備的な論考として館昭（1979）「帝国大学制度調査委員会に関する一考察」（『東京大学史紀要』第2号収録）があったが、これらは基本的には評議会記録に収録された調査委員会の決議内容に依拠したものである。つまり、調査委員会での具体的な議論の内容を確認するためには、『東京大学百年史』執筆当時に使われていない資料を用いる必要があった。

文献調査を進めると、調査委員会の記録資料が存在していたことがわかってきた。科学史家の板倉聖宣氏により1968年に『科学史研究』第92号に掲載された論文「年功序列制と理化学研究所所長人事―長岡半太郎の「教授の黜陟」論」において、委員の一人であった理科大学教授・長岡半太郎が「1918年大学制度会議議事録概要」と題するノートを書き残していたと記述されていたのである。しかも、「現在国立東京科学博物館に保管されている」と収蔵情報まで書かれていた。

国立科学博物館に同資料の所在と利用について問い合わせたところ、筑波研究施設に保管されている「長岡半太郎資料」を閲覧させていただくことになった。資料の利用にあたっては、整理中の

目録から該当する項目を探し、画像で確認することになったが、目録や画像を何度見ても該当する資料は見当たらなかった。さらに収蔵庫にある未整理の棚まで探していただいたが、やはり目当ての資料は見つからなかった。

科博が収蔵している見込みがほとんど無くなったものの、所蔵先の候補としてわずかに心当たりがあったのが、前述の論文を執筆した板倉氏の研究資料である。というのも、板倉氏は前掲論文の5年後に刊行した『長岡半太郎伝』以来、当該資料については言及しておらず、資料の翻刻が中断されたままになっている可能性があったからである。そこで、科学教育の実践団体で板倉氏と縁の深い「仮説実験授業研究会」に連絡を取ったところ、板倉氏の残した研究資料を保管する「科学の碑記念会館」に当該資料が保存されている可能性が高いという知らせが届いたのである。

さっそく新潟県魚沼市の「科学の碑記念会館」を訪問したところ、目当ての資料のコピーが残されていることが分かった。先方は普段から所蔵資料の目録を整備しておられ、今回の問い合わせに対してもすぐ見当がつけられたとのことであった。複製とはいえ非常に貴重な資料であることは間違いのないと思われたため、資料調査の後、東京大学文書館への寄贈についてご検討いただき、この度寄贈が実現した次第である。残雪の積み上がる3月下旬に無理を言って閲覧を申し出たにも関わらず歓迎してくださった「科学の碑運営委員会」の皆さまには、この場を借りて改めて御礼申し上げたい。

続いて、資料の内容について簡単に紹介したい。長岡半太郎関係資料（F0332）の構成は、①板倉氏の研究メモ（F0332/0001およびF0332/0002）、②ノート以外の調査委員会関係資料の複製（F0332/0003）、③ノートの複製（F0332/0004）の3つに区分できる。

③ノートの複製には、議事速記録に加え、調査委員会のメモに使われたと思われる発言者等の記載が無いページが混在している。メモのうち最も長いものは、冒頭2〜7頁（資料に記載の頁数によ

る)に記された文章である。これは板倉氏の著作でいう「教授の黜陟」論にあたり、内容から諮詢事項「教授助教授ノ黜陟」を扱った調査委員会第3回会議の際に長岡が自身の考えをまとめたものと思われる。調査委員会の議事速記録は8頁から66頁までであり、大正7(1918)年4月8日開催の第3回会議から同月30日開催の第10回会議までの模様が記されている。総長の選考制度と任期について決議を行った第1回会議と分科大学長の選考制度と任期について決議を行った第2回会議については、残念ながら議事速記録が取られていない。

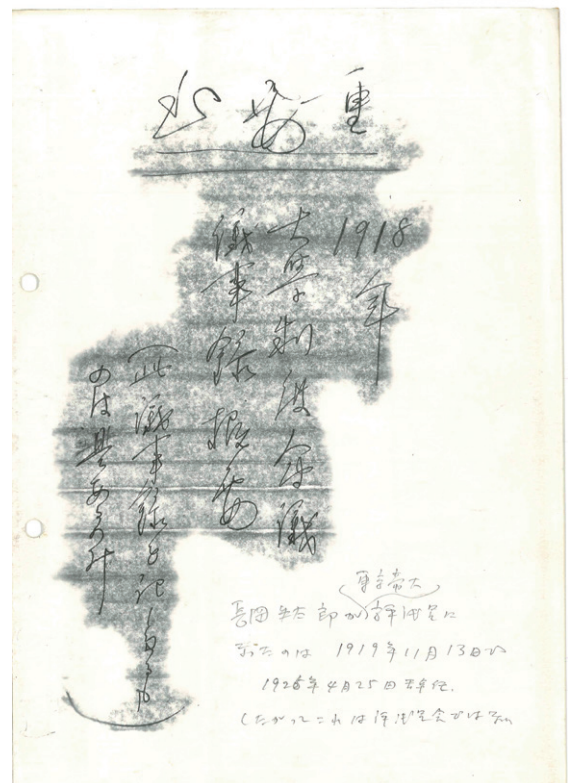
議事速記録には、「長岡 別紙 P.11」というように、自身の発言内容を省略してメモの頁数を指定する箇所があり(12頁)、議事の書き取りと自身の意見を整理するためのメモを並行してノートへの書き込みを進めていたことを想起させる。また、他の委員の発言に対して、「(不徹底)(眠たくなる)」のような括弧書きで私見と思われるコメントを付したり(50頁)、「隣に座せる建部〔遜吾〕批評を見てをれのは何と書いたとき、やく」(41頁吹き出し部分)、「土方〔寧〕(小便に行く)」(57頁)と議事に関係のないことを書き込んだりと、会議の最中に記した故の生々しい表現が含まれている。

②ノート以外の調査委員会関係資料の複製には、まず「良総長を得ること難ければ…」で始まる分科大学長の選考に関する文章が書かれた紙があり、内容から第2回会議に関する長岡によるメモと思われる。次に「臨時調査会ノ決議事項ハ之ヲ各分科大学教授会ニ移シテ…」で始まる調査委員会決議事項の教授会・評議会での取り扱いに関する提案書1枚および「一 学位ト云フ名称ヲ存スルコト万止ムヲ得ザレバ…」で始まる学位制度に関する提案書1枚があり、議事速記録の内容に照らすと、それぞれ第8回会議と第10回会議で藤沢利喜太郎が配布したものと推察される。また、決議事項の他帝国大学への影響について限度を求める「第二提案」と書かれた提案書1枚があり、議事速記録中に明示されていないが、これも藤沢の配布物と思われる。最後に、「総長ヨリ諮詢事項ニ関スル臨時調査委員会決議ノ要点」と書かれた調査委員会決議録2枚がある。同時期の理科大学教授会記録にも同じものが綴じられているが、

長岡半太郎関係資料のほうには内容面の補足と理科大学教授会における表決結果が書き込まれている。

長岡はこの資料をどのように取り扱ったのだろうか。ノートが使用された可能性のある記述が大正12(1923)年12月7日開催の理学部教授会の記録に見出せる。この時、理学部教授会では60歳定年制の厳格な適用が検討されており、その最中「長岡教授ヨリ大正七年ニ於ケル教授停年制審議会ノ経過ヲ報告」したとの記載がある。このときの出席者で調査委員会委員であったのは長岡の他にも藤井健次郎がいたが、記録を残し議事の経過をより詳しく知る長岡が説明者として適任とされたのは想像に難くない。

本資料中ノートの複製に関しては、ペン書きのくずし字が非常に読みづらく、また、読めたとしても文意が必ずしも明瞭ではないため、読解には困難があるが、当時の公的な会議資料からだけでは窺い知ることのできない改革の議論の内容が記されており、貴重な資料であることは間違いない。東京大学史のみならず、大正期の学制改革にご関心のある方に広くご利用いただければ幸いである。



ノートの表紙(複製)。「重要書/1918年/大学制度会議/議事録概要/(此議事録を記したるものには是あるのみ)」とある(鉛筆書きは板倉氏による)。

業務日誌（抄） （2026年1月～2026年6月）

※（本）：於本郷本館、（柏）：於柏分館、（オ）：オンライン

1/10 元、デジタルアーカイブ学会出張
1/13 村上晶彦様より資料寄贈（F0025 史料室アルバム（卒業アルバム））
1/16 森本、百五十年史編纂室会議陪席（オ）
1/21 森本、法人文書管理説明会出講（オ）
1/27 第131回文書館打合せ（本）
1/29 書庫に害虫防除剤散布（本）
1/30 書庫に害虫防除剤散布（柏）
2/3 森本、アーカイブズ関係機関協議会出席
2/4 森本、女性教員幹部養成プログラム ネットワーキングイベント出席（本）
2/6 元、小澤、第9回学術資産アーカイブ化推進室セミナー出席（オ）
2/9 森本、150周年記念事業3館合同展示WG出席（オ）
2/10 森本、立花、百五十年史編纂室会議陪席（オ）
2/12 森本、RRI・ELSIの観点を組み込んだ研究倫理セミナーの取組発表会出席
森本、大阪大学アーカイブズ来館対応
2/16 森本、元（代理出席）、2025年度第2回部局CISO/CERT責任者連絡協議会出席（オ）
所蔵資料（整理済分）の配架状況確認（柏）（～17日）
2/18 森本、日本銀行金融研究所アーカイブ来館対応（本）
環境整備チームによる書架清掃（柏）
2/20 森本、元、慶北大学校見学対応（本）
2/24 第132回文書館打合せ（柏）
2/25 立花、札幌出張（～27日）
2/26 書庫に害虫防除剤散布（柏）
2/27 書庫に害虫防除剤散布（本）
3/3 元、令和7年度第1回総合研究棟安全衛生管理専門委員会陪席（オ）
3/7 森本、茨城県立歴史館視察
3/9 森本、立花、百五十年史編纂室会議陪席（オ）
3/17 立花、百五十年史聞き取り調査に同行
元、令和7年度第2回総合研究棟建物管理専門委員会陪席（オ）
3/18 小澤、都内出張
3/23 東乙比古様より資料寄贈（F0338 東龍太郎関係資料）
3/24 第133回文書館打合せ（本）
次期DAシステム検討報告会（本）
3/27 書庫に害虫防除剤散布（柏）
3/30 柏図書館2025年度企画展示「千葉で始まった東京大学演習林の歴史」終了
元、西スイス応用科学大学バスマ・スハー

ブー博士来日対応（～4月3日、10日）
3/31 寺島宏貴学術専門職員退職
『東京大学文書館紀要』第44号刊行
『東京大学文書館ニュース』第76号刊行
書庫に害虫防除剤散布（本）
4/7 小澤、京都大学附属図書館研究開発室セミナー「スイスにおける研究データ保存管理：経験とイニシアチブ」出席
4/15 環境整備チームによる書架清掃（柏）
4/16 立花、福島県富岡町出張（～17日）
4/19 元、小澤、日本アーカイブズ学会自由論題研究発表
4/20 森本、150周年記念事業3館合同展示WG出席
4/21 立花、福岡出張（～22日）
元、情報セキュリティインシデントに関する説明会出席（オ）
4/27 森本、内閣府公文書管理委員会出席（オ）
4/28 第134回文書館打合せ（柏）
書庫に害虫防除剤散布（柏）
4/30 書庫に害虫防除剤散布（本）
5/1 印出也美学術専門職員着任
5/11 福田和史様より資料寄贈（F0339 福田城二関係資料）
5/12 森本、立花、百五十年史編纂室会議陪席（オ）
健康と医学の博物館展示「東京帝大の看護婦たち」終了
5/13 松崎美沙様より資料寄贈（F0340 斎藤栄治関係資料）
5/14 森本、立花、健康科学・看護学専攻資料確認
健康と医学の博物館展示「戦前本郷キャンパスで学んだ女性たち—看護法講習科の入学志願者から見る時代像—」開始
5/15 資料寄贈（F0341 高津鉄三郎関係資料）
元、令和8年度第1回柏一般公開担当者会議出席（オ）
5/19 森本、元、立花、学習院大学大学院アーカイブズ学専攻見学対応（柏）
5/20 書庫、空調稼働開始（ドライ、25℃）（柏）
5/26 第135回文書館打合せ（本）
5/27 書庫に害虫防除剤散布（柏）
5/28 除湿機稼働開始（本）
5/29 柏図書館2026年度企画展示「100年前の東大—1920年代、社会の変化のなかで—」開始
書庫に害虫防除剤散布（本）
除湿機稼働開始（柏）
6/5 令和8年度第1回文書館運営委員会（オ）

- 6/10 森本、150周年記念事業3館合同展示WG出席（オ）
 6/12 森本、元、全国公文書館長会議出席（オ）
 元、令和8年度第2回柏一般公開担当者会議出席（オ）
 櫻蔭同窓会より資料寄贈（F0342 櫻蔭同窓会関係資料）
 6/15 森本、立花、百五十年史編纂室会議陪席（オ）

- 森本、元（代理出席）、2026年度第1回部局CISO/CERT責任者連絡協議会出席（オ）
 森本、部局女性人事加速（5カ年計画及び3カ年計画）のための意見交換会出席（オ）

- 6/24 環境整備チームによる書架清掃（柏）
 6/26 書庫に害虫防除剤散布（柏）
 6/29 書庫に害虫防除剤散布（本）
 6/30 第136回文書館打合せ（柏）

資料の公開について (2026年1月～2026年6月)

上記期間内に整理を終え、新たに公開した特定歴史公文書等ならびに歴史資料等の資料群は、以下のとおりです。

※概要記述とアイテムリスト（目録）、既存資料群へのアイテム追加は、当館のデジタル・アーカイブからご確認ください
<https://uta.u-tokyo.ac.jp/uta/s/da/page/home>。

特定歴史公文書等

全学事務

- S0797 施設・設備等の管理に係る財務文書
 S0799 柏キャンパス共同学術経営委員会
 S0800 ベクトル並列型スーパーコンピューターシステム（SR11000）
 S0801 女性研究者育成・女性教員増加事業
 S0802 国際化拠点整備事業（大学の国際化のためのネットワーク形成推進事業）：グローバル30
 S0803 スーパーグローバル大学創成事業
 S0805 卒業生室全体会議
 S0806 学年歴・時間割標準化
 S0807 学内統一ID体系構築・ICカード運用
 S0811 東京大学21世紀学術経営戦略会議（UT21会議）

部局

- S0798 新領域創成科学研究科 ライフサイエンス倫理審査関係
 S0804 東京大学理学部放射線管理委員会
 S0809 法学部 授業時間割・授業概要一覧
 S0810 農学部 授業時間割・授業概要一覧

歴史資料等

総長・役員・教員資料

- F0047 教育学部運営関係資料

- F0258 吉澤昇・勝田守一資料
 F0332 長岡半太郎関係資料

職員資料

- F0110 山口清次郎関係資料
 F0270 三浦俊暁関係資料
 F0302 石井保二関係資料

学生資料

- F0163 加藤（塩谷）明雄関係資料
 F0274 岡田靖雄関係資料
 F0306 守田亀関係資料
 F0324 1980年文学部卒業生（女性）関係資料
 F0328 井上俊治関係資料
 F0330 佐々木正展関係資料

教育・研究組織資料

- F0083 教育学部図書館旧蔵資料
 F0310 森林動物学研究室旧蔵写生画帖

関係団体資料

- F0184 東京大学セツルメント関係資料

その他

- F0277 公開講座受講資料

今期間中も個人や団体から多数の資料を寄贈いただき、ありがとうございました。引き続き、東京大学に関する資料・学内刊行物のご寄贈をお待ちしています。

三 文書館Topics 三

東京大学文書館の業務に学ぶ

5月19日に筆者が担当している授業「アーカイブズ管理研究Ⅱ（レコードキーピング論）」の受講生および希望するアーカイブズ学専攻院生で東京大学文書館を訪問した（計8名）。アーカイブズ機関が実際にしている業務（受入・整理・公開・利活用・保存）を一連の過程として、関連性を意識しつつ、大学で学ぶ個々の授業内容の理解を深めることを目的とした。

当日は、法人文書部門・歴史資料部門・デジタルアーカイブ部門の説明を受け、収蔵庫等の施設を見学した。法人文書や歴史資料といった種別によって、その業務の考え方の違いを聞くことができ、有意義な訪問であった。また、参加者はそれぞれ問題意識を持って参加しており、次のような感想を抱いている。訪問を通して理解を深めることができたものと感じている。

（学習院大学大学院人文科学研究科アーカイブズ学専攻 助教 大木悠佑）

記録やアーカイブズの管理に携わる職員は、保存すべき対象が適切に管理されるよう、作成課と連携し、作成・管理状況について確認、助言することが必要といわれるが、実際にはその部署の権限や人手、他の業務との兼ね合いなどもあり、どのように対応すべきか、難しく感じるがあった。

今回の見学では、当該年度の移管対象を確認するため作成課を訪問した際に、次年度以降の対象の確認も兼ねたり、ファイルの背に作成課での管理番号を明記して管理しやすくしている話を伺い、作成課にアプローチできるタイミングを逃さず、管理状況の改善をより効果的に促すことの重要性を感じた。こうした知見を実務や、理論から実務へ落とし込む際に活用していきたい。

（日本赤十字社広報室赤十字情報プラザ 山口翔子）

私は東京藝術大学の大学史史料室に勤務していることもあり、今回の見学は「国立公文書館等」の指定を目標とする大学の職員として、その運営や実務について学ぶ貴重な機会であり、大変楽しみにしていた。

見学では、各部門の実務について具体的な話を伺い、大変勉強になった。特に印象的だったのは、各部門での資料管理が、単なる日常業務ではなく、理論と実務を往還しながら展開されていたことである。理論を実務に反映し、その成果を踏まえて実践を積み重ねる姿勢が、記録の適切な管理や利活用を支えていることを実感した。

（東京藝術大学未来創造継承センター大学史史料室 学術インストラクター 湯地ふたば）



施設見学の様子

東京大学文書館ニュース 第77号

ISSN 0915-3284



東京大学文書館
The University of Tokyo Archives

発行 日：2026年9月30日（年2回発行）

編集・発行：東京大学文書館

〒113-8654 東京都文京区本郷7-3-1

電 話：03（5841）2077（直）

Eメール：daigakus.adm@gs.mail.u-tokyo.ac.jp

ウェブサイト：<https://www.u-tokyo.ac.jp/adm/history/index.html>

印刷 所：株式会社 テンプリント

